

教育委員会月報



文部科学省

特集 キャリア教育に関する取組

Series 地方発！我が教育委員会の取組

茨城県神栖市教育委員会

神栖市のキャリア教育 NEXT10

新潟県三条市教育委員会

「地域ぐるみで子どもを育む」

三条キャリア教育バンクの挑戦

福井県教育委員会

地域の未来を創造する

「ライフデザイン教育」の推進

お知らせ I 研究機関とSTEAM教育をつなぐオンラインセミナーの開催について
II 昭和100年アーカイブズに見る女性活躍のあゆみ展



2026年8月19日発行 第78巻5号

2026 August



特集 キャリア教育に関する取組

Series 地方発! 我が教育委員会の取組

茨城県神栖市教育委員会

神栖市のキャリア教育 NEXT10

～10年間学ぶ意欲を継続させるために～ [1](#)

新潟県三条市教育委員会

「地域ぐるみで子どもを育む」 三条キャリア教育バンクの挑戦

～ふるさとの「よさ」を語り、「未来」をつくることのできる人材育成へ～ [5](#)

福井県教育委員会

地域の未来を創造する 「ライフデザイン教育」の推進

..... [10](#)

お知らせ

I 研究機関とSTEAM教育をつなぐオンラインセミナーの開催について [15](#)

II 昭和100年アーカイブズに見る女性活躍のあゆみ展 [17](#)

神栖市のキャリア教育 NEXT10

～10年間学ぶ意欲を継続させるために～

1 はじめに

茨城県の最東南端に位置する神栖市は、東は太平洋、西は利根川に面した、水と緑に恵まれた平坦な地形を有しています。人口は約93,000人であり、2005年の旧神栖町と旧波崎町の合併以来、県内でも活気ある中核都市として発展を続けています。本市の最大の特徴は、日本屈指の規模を誇る「鹿島臨海工業地帯」を擁している点です。石油化学やエネルギー、金属加工などの広範な産業が集積しており、製造品出荷額等において県内トップクラスを維持する、茨城県の経済を牽引する存在となっています。また、温暖な気候を活かした農業も非常に盛んです。特にピーマンは全国一の出荷量を誇るほか、千両や若松といった花卉栽培でも知られており、工業と農業がバランスよく共存している点が大きな特色です。教育環境については、小学校14校、中学校8校が設置されています。少子高齢化が進む現代において、県内でも比較的高い出生率を維持しています。

2 NEXT10について

神栖市では、次世代を担う子供たちの成長を支える柱として、10年後を見据えた「授業・学校・人」づくりをキャリア教育の視点から推進しています。この取組は、単なる職業教育の枠を超え、以下の三つのフェーズで重層的に構築されている点に大きな特徴があります。

(1) 保育園・幼稚園から中学校卒業までの10年間

保育園・幼稚園から小学校、中学校へと至る円滑な連携を通じ、発達段階に応じた継続的な支援を行います。集団生活や多様な学習体験の中で、子供たちが自らの価値を認める「自己肯定感」と、集団の中で役割を果たし他者に貢献する「自己有用感」を育むことを中核に据えています。

(2) 中学校卒業から25歳までの10年間

義務教育終了後も、高校・大学、そして社会人という各ステージが途切れることなくつながる仕組みを構築しています。地域社会全体で若者を育てる「人づくり」を「まちづくり」の一環として捉え、若者が地域への愛着を持ち、主体的に社会に参画する基盤を整えています。

(3) キャリア教育を推進する仕組みづくりや専門的人材が生かされる場づくり

学校現場だけで完結させず、外部の専門的人材がその知見を最大限に発揮できる場を創出するとともに、教育と産業、行政が一体となってキャリア教育を推進する仕組みを制度化しています。

このように、神栖市は「ひと」の成長を点ではなく保幼小中の10年、その後の10年と、20年という長期的な成長の流れとして捉えています。強固な産業基盤を背景に、次世代が自己の可能性を切り拓き、地域社会の持続的な発展に寄与する「神栖キャリア教育」のモデルを確立しようとしています。



3 10年間の学習を支える3つの柱

(1) キャリア・パスポートで「自分らしさ」を発見!

児童生徒一人一人が、自らの歩みを振り返り、未来の自分を描き出す「キャリア・パスポート」。この取組を単なる記録に終わらせず、真の「自分らしさ」を発見するプロセスへと高めるため、神栖市では以下の2つを軸に指導を充実させています。

① 系統的な学びで育む、自尊感情と自己肯定感

各学校では、発達段階に応じたキャリア発達の特性を深く理解し、小学校から中学校、そして高等学校へとつながる「学びのバトン」を意識した指導計画を策定し共有します。異なる学校種の活動を互いに把握することで、今取り組んでいる活動が将来にどう結びつくのかを明確にし、見通しを持った指導を展開します。日々の成功体験や試行錯誤を丁寧に記録し、客観的に自分の成長を実感させることで、「自分にはこんな力がある」「ありのままの自分でよい」という、自尊感情と自己

肯定感をじっくりと培っていきます。

② 確実な引き継ぎが支える、一人一人に寄り添った支援

子供たちの成長の軌跡である「キャリア・パスポート」の情報は、学年や学校の壁を越えて確実に共有されます。各教員が子供たち一人一人のこれまでの葛藤や気付きを的確に把握することで、環境が変わっても途切れることのない「きめ細やかな支援」が可能になります。校種間の円滑な連携体制を構築し、過去・現在・未来を一貫した視点で見守る体制を整えることで、子供たちが安心して自分自身のキャリア（生き方）を模索し、磨き続けられる環境を保証しています。

(2) 自分たちで考え、動く!解決への道

① 未来を展望し、組織で支える「キャリア教育推進計画書」の策定と充実

各小中学校において、義務教育9年間を見据えた「キャ

「キャリア教育推進プロジェクト」実施計画書

「キャリア教育推進プロジェクト」 ～10年間学習を意欲を継続させるために～		
1 学校名 (児童生徒数 教職員数)		
2 児童生徒に身に付けさせたい力 (育てたい力) (◎は重点とする力)		
◎ 学習や活動と自分の将来や生活を結び付けて生かそうとする力	(◎) かなえる力: キャリアプランニング能力	
○ 他者と関わるときに、相手のことを考えながら、思いを伝えたり、受け止めたりする力	(◎) たえあう力: 人間関係形成・社会形成能力	
◎ どんなときでも、前向きな態度で行動しようとする力	(◎) りぬく力: 自己理解・自己管理能力	
○ 課題に直面したときに、多様な方法で解決しようとする力	(◎) ふうする力: 課題対応能力	
3 プロジェクト名	「わくわく トライ! か・つ・や・く」プロジェクト	
4 プロジェクト内容		
○ 基礎的・汎用的能力を本校児童の実態に応じて自校化した、キャリア教育の合い言葉「か・つ・や・く」の視点を取り入れた教育活動を実施する。		
○ 教科等横断的な学習や相手意識・目的意識をもった学習を計画的に実践することで、学んでいることが他の学習や生活、将来の夢につながっていることを児童が自覚できるようにしたり、自己有用感を味わえるようにしたりすることで、児童の主体的な学びを促すようにする。		
○ 外部人材との連携・活用を図ることで、児童にとって職業について考えたり、生き方について触れたりする機会を確保し、児童の学ぶ意欲が向上できるようにする。		
○ 学校行事や縦割り班活動等を実施する際は、児童会役員、学級委員、実行委員、縦割り班の班長等が中心になって企画・運営する機会を意図的に多く設定し、児童の主体性を育んだり、自己の役割を自覚させたりすることで、学校に貢献する経験や人の役に立つ経験を積み、自己有用感や所属意識の醸成を図る。		
5 予定実施時期	令和7年4月～令和8年3月 (通年)	
6 各学年及び教科等の目標		
学年・教科領域	目 標	基礎的・汎用的能力
1・2年各教科	学習していることの楽しさや大切さを感じることができる。	かなえる力
3・4年各教科	学んでいることの必要性や大切さを感じ、自分の生活と結びつけて考えることができる。	かなえる力
5・6年各教科	学んでいることの必要性や大切さを感じ、将来の夢や生活と結びつけて考えることができる。	かなえる力
特別活動	自分の役割を自覚し、どんなときでも、前向きな態度で行動しようとする力	やりぬく力
7 活動予定		
活動予定	特別活動・縦割り班活動等	学習スタイル
5月	委員会活動開始 (通年) 縦割り班活動開始 (通年)	職員研修 (通年)
9月	職業人の話を聞く会 (高学年)	研究授業 (通年)
11月	人権集会 第6学年修学旅行 (職業体験)	提案授業 (キャリアの視点)
3月	児童会役員立会演説会・役員選挙 6年生あがりとうの日 卒業式	授業力向上・環境整備
8 今年度、期待される成果		
○ キャリア教育の合い言葉「か・つ・や・く」の視点を取り入れた教育活動を実施することで、協働的に課題を解決し、学んだことを他の学習や生活、将来の夢に生かそうとする児童の育成が期待される。		
○ 各教科や特別活動等で相手意識や目的意識をもった異学年交流を計画的に行うことで、自分の役割を果たすことの大切さや人の役に立つ喜びを実感し、児童の自己肯定感や自己有用感の高まりが期待される。		
9 その他		
○ キャリア教育の視点を踏まえた、持続可能な、児童にとって効果的な授業や学校行事等の実践を推進する。		

リア教育推進計画書」を策定し、学校全体の教育活動の中にキャリア教育の視点を明確に位置付けています。

推進計画書は、教員が「どのような資質・能力を育てるか」という共通認識をもつための重要な指針となります。単なる学校行事に終わらせることなく、日々の教科の学習や特別活動、学校行事などを有機的に関連付け、子供たちの変容を組織的に捉えます。地域や企業ともビジョンを共有し、学校・家庭・地域が一丸となって子供たちの夢の実現を支える体制を強固に構築していきます。

② 社会との接続を意識し、自立の基盤となる基礎的・汎用的能力の育成を体現

日々の教科の学習において「この学びが将来、社会でどのように役立つのか」という視点を常に提示し、学校での学びと実社会の結びつきを意識させます。

将来、子供たちが社会的・職業的に自立するためには、専門的なスキル以上に、人間関係形成能力、情報活用能力、意思決定能力といった「基礎的・汎用的能力」が不可欠です。職場体験やインタビュー調査、職業人と語る会、外部講師を招いた授業などを通じて、多様な生き方や働くことの意義を実感させ、社会の変化に柔軟に対応しながら自分らしいキャリアを切り拓いていくための、揺るぎない土台を育成します。

③ 社会の担い手として、課題解決を話し合い、実行する主体性の育成

子供たちが、学校内や地域、さらには現代社会が直面している課題に主体的に関わる姿勢を重視します。

「誰かが解決してくれるのを待つ」のではなく、身近な問題に自ら目を向け、よりよい社会にするための方法を多角的に議論し、具体的な改善策を提案したり、実行したりするプロジェクト型の活動を推進します。仲間と対話し、試行錯誤しながら行動を起こす経験を通じて、社会参画への意識を向上させます。「自分たちの行動で周囲が変わった」という手応えは、社会を支える一人としての自覚を芽生えさせ、困難な課題にも立ち向かう実践力を養うことができます。

④ 成果を可視化し、次年度へつなぐ「キャリア教育実績報告書」の作成

実績報告書では、年間を通して取り組んだキャリア教育の成果を、子供たちの変容や具体的な活動事例とともに整理します。計画と実践の連動性を振り返り、成果と課題を明確にすることで、次年度の改善に生かす循環を生み出します。また、学校・家庭・地域が成果を共有することで、キャリア教育を支える協働体制の強化にもつなげます。

(3) 「本物」に出会い、夢をふくらませよう！ キャリ☆フェス神栖

① 子供たちの探究心を育てる体験型ワークショップ

市内外の企業・事業所や近隣大学の協力を得て開催される「キャリ☆フェス神栖」は、子供たちが社会の最前線に触れる最高の実践の場です。ここで展開されるワークショップは、単なる見学や疑似体験ではありません。プロの技術や大学の研究を実際に体験しながら学びを深められる、実践的なワークの場です。

子供たちは、教科書で学んだ知識が目の中の製品や技術とどのようにつながっているのかを実感し、知的好奇心が大きく刺激され、学びへの意欲が一段と高まります。学校・地域・多様な組織がスクラムを組み、神栖の未来を創る子供たちの「もっと知りたい」という探究心を、地域一丸となって全方位から支え、育んでいきます。



② 多様な先輩たちとの対話が導く、未来につながる「新しい自分との出会い」

キャリ☆フェス神栖の会場では、中学生が自分の未来について、高校生や大学生、地元の社会人、そして大学教授らと膝を突き合わせて語り合う「未来対話」の場を創出しています。思春期という多感な時期にある中学生にとって、家族や先生とは違う立場の大人たちとの交流は、新たな自分を映し出す鏡のような存在になります。

憧れの高校生活、専門的な大学での研究、そして社会で働くことの喜びと難しさ。多様な価値観を持つ先達との対話を通じて、中学生は自身の可能性を再認識し、「自分はどのように社会に貢献したいのか」という問いに対する自分なりの答えを、より具体的かつ主体的に描き出していきます。



③ 社会とつながる力を育む「中学生起業体験」

キャリ☆フェス神栖では、中学生が自らのアイデアを形にし、社会に向けて価値を届ける「中学生起業体験」を行っています。身近な課題や地域の魅力に目を向け、仲間と意見を交わしながら企画を練り上げていくプロセスは、まさに“自分の力で未来をつくる”実践の第一歩です。

中学生たちは企画づくりの過程で、まず身の回りにある課題や地域の魅力に目を向け、どのような商品やサービスが求められているのかを丁寧に考えます。実際に話を聞いたり調べたりしながら、必要とされるニーズを把握し、「どんなものなら喜んでもらえるだろう」と想像を広げていきます。アイデアが固まると、仲間と意見を交わしながら形にしていき、試作品づくりや改

善にも挑戦します。そして、完成した商品を自分たちの言葉で紹介し、来場者に販売します。自ら考え、工夫し、届ける一連の体験を通して、子供たちは社会とつながる手応えを実感し、主体的に行動する力を育んでいきます。この一連の体験を通して、中学生は「自分にも社会を動かす力がある」という確かな自信を育み、未来への視野を大きく広げていきます。



4 おわりに

本市は、幼保から中学卒業、さらに25歳までを一つの成長の流れとして捉え、切れ目なく学びを支える体系的なキャリア教育を進めています。子供たちはキャリア・パスポートを通して自分らしさを見つめ、課題解決型学習により主体的に考え行動する力を育みます。さらに、「本物」との出会いを提供するキャリ☆フェス神栖によって夢や将来像を広げ、地域全体で子供たちの未来づくりを支えています。特に、キャリ☆フェス神栖は、今年で5回目を迎え、参加団体や教育関係者から高い評価をいただく取組へと成長しました。産業界・学校・行政が一体となって築いてきた連携は、着実に深まりつつあり、こうした協働の力が子供たちの成長を後押ししています。

今後も、教室だけでは得られないリアルな体験を大切に、子供たちが誇りをもって未来を語るキャリア教育を推進していきます。

「地域ぐるみで子どもを育む」 三条キャリア教育バンクの挑戦

～ふるさと「よさ」を語り、「未来」をつくることのできる人材育成へ～

1 はじめに

三条市は新潟県のほぼ中央に位置し、金属加工業が盛んな全国有数の「ものづくりのまち」として知られています。江戸時代から続く和釘づくりの伝統を受け継ぎつつ、高度な加工技術を活かした成長ものづくり分野を始め、多様な交通・物流インフラ、小中一貫教育を中心とした教育環境、豊かな自然環境が特徴的な地方都市です。

三条市教育委員会では、これらの三条市の特色を生かしたキャリア教育を学校教育の中核として推進しています。特に、令和7年1月15日に開設した「三条キャリア教育バンク」（以下「バンク」という）を通して学校と産業界のニーズを結び付けると共に、新たな価値を生み出す「これまでにない教育プラットフォーム」づくりに挑戦しています。

2 挑戦の背景

バンク開設の背景には、2つの時代の変化がありました。

1つは、産業界を取り巻く人手不足・担い手不足の深刻化です。特に、感染禍以降、地元産業界から「まず自社を子供たちに知ってほしい」「学校と連携してものづくりの楽しさや価値を知らせたい」というニーズの高まりが見られました。

もう1つは、教育界を取り巻く教員不足と教員の多忙化です。三条市勤務が初めて、三条市に来ること自体が初めてという教員も少なくありません。また、三条市のことを知ろうにも、日々の業務に追われ、その時間が取れず、子供たちのニーズに合った事業者の存在を知らない現状が見られました。この変化は、一見マイナス面と捉えがちですが、逆に見れば、互いに非常に強いニーズを有しているとも言えます。ただ、学校・事業者それぞれに、このニーズの充足方法を任せても、正直うまくはいきません。互いにとって、必要感は分かっているにもかかわらず、優先順位が低いからです。

そこで、互いのニーズをマッチングし、少しでも連携した体験活動に結び付きやすくする仕組みとして、バンクの構想が膨らんでいきました。なお、開設に向けた検討会議では、市長部局経済部商工課と三条商工会議所から、毎回御助言を頂き、互いにバンクのイメージ図（図1）を共有していきました。

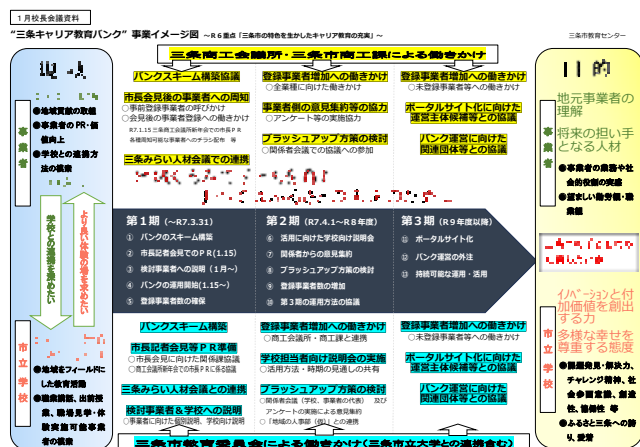


図1 三条キャリア教育バンク事業イメージ図(開設前)

3 三條市のキャリア教育

三条市では、キャリア教育を「自分と実社会のつながりを実感し、未来を切り拓く学び」と捉え、「よさ」を語れる、「強み」を生かせる、「共に」やり抜けるの3つの子供の姿の具現化を目指しています。

そこで、令和7年度に、学園（※1）単位の小中一貫教育カリキュラム「キャリア教育編」を作成し、学園ごとに「職業的自立」と「社会的自立」の両面で重視する資質・能力を定めています。（図2）



図2 小中一貫教育カリキュラム「キャリア教育」編

この小中一貫教育カリキュラム「キャリア教育」編をもとに、地域をフィールドにし、実社会とつながりをもった教育活動を推進する上で核となるのが、「三条キャリア教育バンク」であり、「学校・学園運営協議会（※2）」

となっています。

4 三條キャリア教育バンクとは

一言で言えば、「事業者のニーズと学校のニーズをマッチングする仕組み」です。ただし、単なる人材バンクではなく、双方向性をもつことが大きな特徴です。

登録者数は、107 事業者（令和8年8月7日現在）であり、三条市立学校の教育活動に、原則無償で御協力いただいています。

どの事業者もバンクの趣旨（詳細は登録事業者紹介サイト（※3）で掲載している登録募集チラシ裏面参照）に強く賛同していただき、「自社を知ってほしい」「学校と連携して子供たちに体験活動をしてほしい」という願いの具現のためにバンクを活用されています。

また、学校側も「体験活動に協力してもらえる事業者を知りたい」「子供たちのニーズに合わせた体験活動を行いたい」という願いを叶えるために活用しています。

現在は、主に年2回（春と夏）、学校から登録事業者への体験活動マッチング希望を市教委が受け付け、登録事業者ごとに仕分けをして連絡し、可否を確認しています。その結果についても、市教委から学校へ通知し、マッチング可となった学校は、スムーズに体験活動内容の打合せを行うことが可能となっています。（図3）

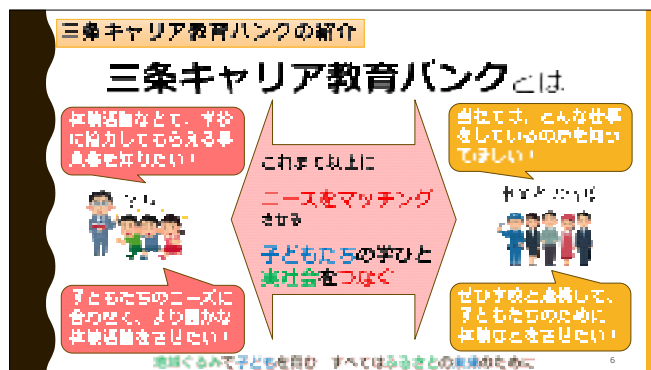


図3 三条キャリア教育バンクとは(活用説明会資料)

5 事業推進の取組

新規事業だけに、知名度を向上させることと事業の価値を周知することに苦心しながらも、より取組の効果を上げるべく、次の7点の取組を三条市教育委員会が主体となって進めてきました。

①市長からの発信

開設については、令和7年の新年1回目の市長記者会見における最初の会見内容として公表しました。翌日以降、地方新聞を含め4つのメディアから取り上げてもらいました。また、市長と共に担当者がラジオ番組にも出演し、周知を図ってきました。（市長記者会見は、その後もう1回実施）

②チラシによる登録依頼

数ある地元事業者に対して、1者でも多くの登録を促すために、登録事業者募集チラシ（図4）を作成し、次の手法で配布しました。

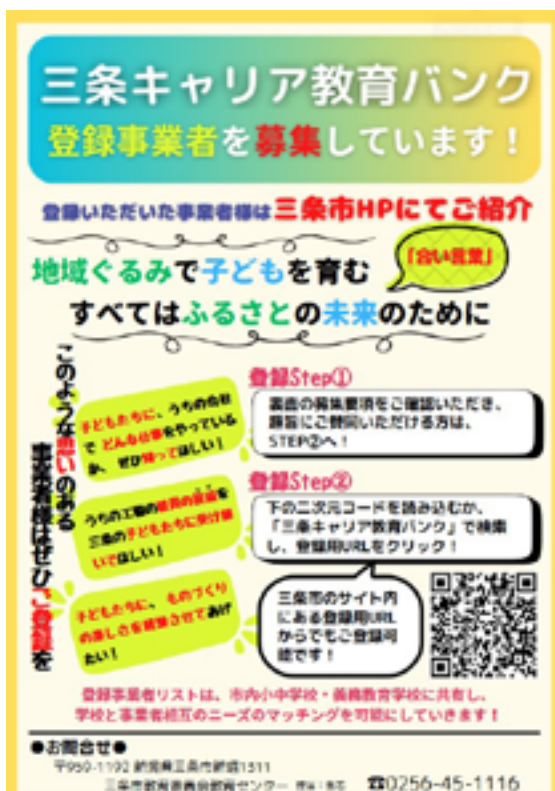


図4 三条キャリア教育バンク登録事業者募集チラシ

ア：令和7年度、市内28校の学校教育活動に協力していただいた事業者（約200者）に対する郵送

イ：三条市商工課が把握している事業者宛て（数百者）へのチラシ添付メール送信

ウ：三条市商工会議所の一斉FAXによるチラシ送信（数千者）

エ：未登録事業者との連携時における学校の先生方からのチラシ配布（最も効果有り!）

③登録依頼訪問

もちろん、教育委員会事務局職員も数多くの事業者へ登録依頼訪問を行いました。商工会議所の会員、登録事業者からの紹介、市長等からの声かけによりつながりを持つことができた事業者を訪問しました。また、9つの学園別、事業種別により分けた登録事業者マトリクス表を作成し、ターゲットを絞った訪問も行いました。

なお、御登録いただいた事業者には、登録証を発行すると共に、登録マークのデータ（下図参照）も提供しています。

登録事業者の中には、店舗のレジ脇に飾っていただいたり、名刺のデザインに入れていただいたりしている方もおられます。

④バンク活用説明会（毎年4月開催）

4月に三条市に赴任された先生方も多いこと、また年々バンクの仕組みもブラッシュアップされることから、毎年4月に、教員向け活用説明会を実施しています。



マッチングの時期や方法を共有するだけに留まらず、県内のコンサルティング企業の方を講師に招き、学校が事業者（地域）とチームになって子供を育てるポイントについての講話を取り入れています。このことで、先生方が、活動を進める上での留意点を実感を伴った形で確認し、取組への活力を高めることができています。

⑤バンク活用ハンドブックの配布

活用説明会で御講話いただいた方からは、「三条キャ

リア教育バンク活用ハンドブック」(図5)も作成していただきました。このハンドブックは、先生が事業者との連携における事前・当日・事後に行うことなどについて、6つのステップで分かりやすく記載してあります。地元の経済新聞にも取り上げられ、まさに三条市に勤務した先生のみが使えるバイブル的なハンドブックとなっています。

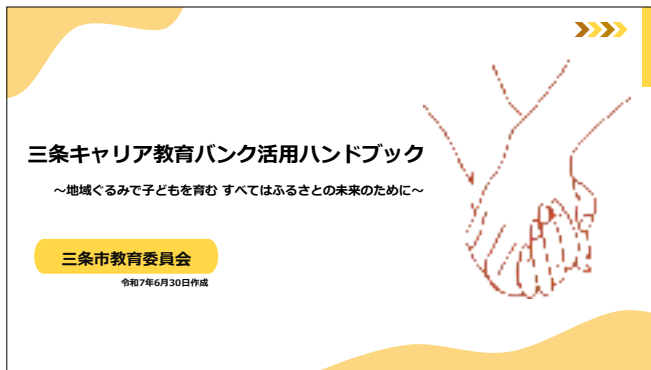


図5 三条キャリア教育バンク活用ハンドブック

⑥ バンク成果報告会（年度末に開催）

開設して1年が経った令和8年2月24日に、初年度事業への感謝と今年度の活動報告を趣旨として、成果報告会を実施しました。

当日は、三条市立学校の先生方、登録事業者、一般の事業者で、対面・オンライン合わせて60名を超える御参加がありました。会では、2事業者及び2校の先生からの事例紹介やパネルディスカッションを行い、どの参加者からも高い評価をいただきました。特に「バンクによって、社員のモチベーション向上につながった」



三条キャリア教育バンク成果報告会パネルディスカッションの様子

という声を複数の事業者から頂き、初年度としては満足 of いく取組になったのではないかと感じられました。

⑦ 三条の人事部コンソーシアムとの連携

三条市経済部商工課が立ち上げた地域の人事部である三条の人事部コンソーシアムに、三条市教育委員会教育センターがバンクの創設・運営事務局として参加しています。キャリア教育推進の班に所属し、バンクの更なる知名度向上にお力添えを頂いています。今後も、小中高におけるキャリア教育の連続性・系統性の検討などで、産官学の連携を進めていければと考えています。

6 成果と課題

特に強く感じている成果は、事業者側からの学校に対する「距離感」を縮めることができたことです。事業者からは、「我が社を知ってもらう良い機会になった」「将来の働き手に繋がる期待感がある」といった声を頂いたことは、その証左であると考えています。

ただ、課題は山積みです。何より、事業者数が少ないこと、それに伴う知名度不足が最大の課題です。確かに、実利がある訳でもなく、将来の「種まき」にしただけ過ぎないかもしれない小中義務教育学校との連携には、大きな魅力は感じられないかもしれません。ただ、「大都市などとの人材の綱引きに負けない」三条市となるためにも、今後もひたむきに周知を行い、いつの日か「三条といえば『キャリア教育バンク』」と言われる日を夢見て登録事業者確保に邁進する覚悟です。

7 これからの挑戦と将来像

今年度、バンク登録事業者を紹介するHPの改修予算を計上し、次年度に向け、利便性や操作性の高まる新たなHPの構築を進めています。しかも、新HPには「双

方向性機能」という、事業者・学校の互いのニーズを見える化し、マッチングもほぼ完結できる仕組みを兼ね備える予定です。

これまで聞いたこともない「双方向性機能」を備えたバンクは、間違いなく学校側の業務の効率化を図ると共に、事業者側の学校へのアプローチをしやすくし、新たなマッチングを含めた価値の創造を生み出すものと期待しています。

そして、このバンクを通した多様な体験活動を通して、三条に生まれ育った子供たちが、ふるさとの「よさ」を語り、いずれはこの地の「未来」を担い、切り拓く人材となっていくものと信じています。

※1 中学校区、小中一貫教育の推進を図るため、三条市では9つの中学校区に、それぞれ独自の学園呼称を定めています。

※2 学園ごとにも運営協議会を設置し、学園内の各学校の代表者等が参集して、学園のグランドデザインの承認や教育課題の熟議等を行っています。全国的にもめずらしい取組であり、三条市では、令和2年から学校運営協議会と共に導入しています。

※3 三条キャリア教育バンク登録事業者紹介ページ

<https://www.city.sanjo.niigata.jp/soshiki/sanjoukyouiku/kyoikuiinkaijimukyoku/gakkoukyouikuka/gakkou/career/18919.html>

地域の未来を創造する 「ライフデザイン教育」の推進

1 はじめに

近年、生成AIの登場や人生100年時代の到来により、産業構造や個人のライフスタイルなど、子供たちを取り巻く環境が大きく変化しています。また、福井県においては、令和6年3月に北陸新幹線が開業し、各地の駅や観光地を中心として、まちの姿も変化し、新たなにぎわいや人の流れが生まれています。

こうした社会や地域の変化の中で、子供たちが将来の夢や目標を描き、それに向けて挑戦する力を育むためには、「あるべき地域の未来」や「なりたい自分」を自ら構想し、未来を起点として、自らの将来を選び取っていく姿勢が重要であると考えています。

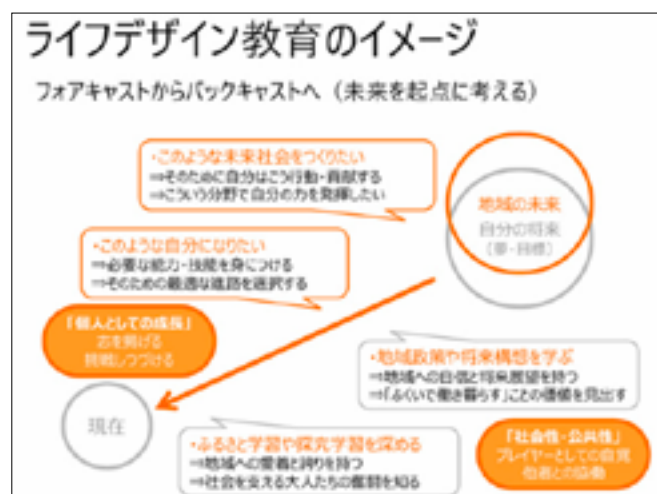
そこで、本県では、地域との関わりの中で、自分の将来や生き方を考える機会をできるだけ多く提供する「ライフデザイン教育」を推進しています。生徒一人

ひとりが「地域の未来」と「自分の人生」がつながっていることを理解し、「地域社会をもっと良くしたい」という意識を育むことを目指し、地域について学び、考える機会の充実を図るとともに、地域の課題解決や価値向上に挑戦する生徒を応援しています。

2 「地域デザイン講座」の開催

本県では、「ライフデザイン教育」の一貫として、令和6年7月から藤丸伸和県教育長が講師となり、福井県の将来と地域政策について考える「地域デザイン講座」を開催しています。

令和8年6月までに延べ33校において講座を開催し、1,600人以上の生徒が受講しました。講座では、福井県の良さや課題についてグループワークで話し合うとともに、人口減少対策や新幹線開業後の福井の変化などを伝え、2040年を目途とする望ましい「地域の未来」



【地域デザイン講座での講義の様子】

を自ら考えるワークを行っています。地域の未来をつくるのは生徒一人ひとりの「志と行動」であることを伝え、自分の人生と地域との関わり方についての自覚を促しています。

受講後のアンケートでは、受講した生徒のうち、約8割が「福井の未来に希望が持てた」と回答しているほか、受講前後で「福井で暮らしていることに誇りを持つ気持ち」や「将来福井で暮らしたいと思う気持ち」が大きく増加しています。

また、「今まで知らなかった福井の良さを知ることができた」「将来、福井のために何かしてみたいと思った」などの感想が寄せられるなど、講座が地域への自信と貢献意欲に繋がっています。

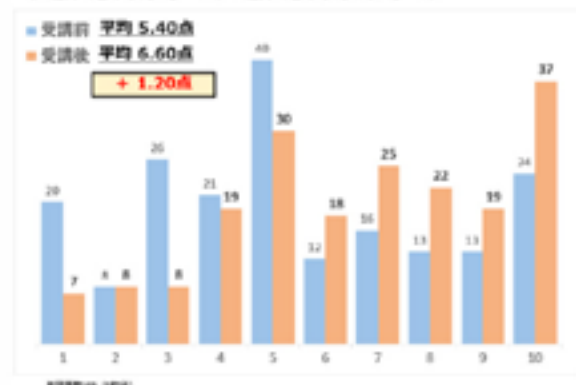
○福井の暮らしへの誇り（受講前後の変化）

①福井で暮らしていることに誇りを持っているか。
（「誇りを持っている」＝10、「誇りを持っていない」＝1）



○将来の福井への居住希望（受講前後の変化）

②将来、福井で暮らしたいと思うか。
（「福井で暮らしたい」＝10、「福井で暮らしたくない」＝1）



【受講者アンケートの結果】

3 地域の産業・企業と連携した学び

本県には、国内外で大きなシェアを有している製品や先端技術を有する企業が多く存在しています。こうした国内や世界で活躍する地域の企業を知ってもらうことは、高校生が将来の進む方向を考えるうえで極めて重要であると考えています。

本県では令和3年度から、県内の企業・団体の皆様と連携し、工業や農業、商業などの専門知識を学ぶプロ人材高校の1年生を対象とした一斉オンライン授業「ふくい産業」を実施しています。

本授業では、産業界の第一線で活躍する企業の経営者や技術者を講師としてお招きし、各企業の事業内容や技術の強み、仕事のやりがいなどについてお話しいただいています。あわせて、生徒からの質問に直接お答えいただく機会も設けています。こうした取組を通して、将来本県の産業を担っていくプロ人材高校の生徒たちが、県内企業の仕事内容や魅力への理解を深めるとともに、地元で働くことの意義や可能性について考えるきっかけとなっています。

令和7年度には県内の企業・団体12社にご協力いただき、プロ人材高校の全ての1年生53クラス、約1,600人に授業を実施し、県内産業・企業の魅力を発信しました。生徒からは「福井の企業が支えてくれているおかげで、私たちの生活が成り立っていると分かった」



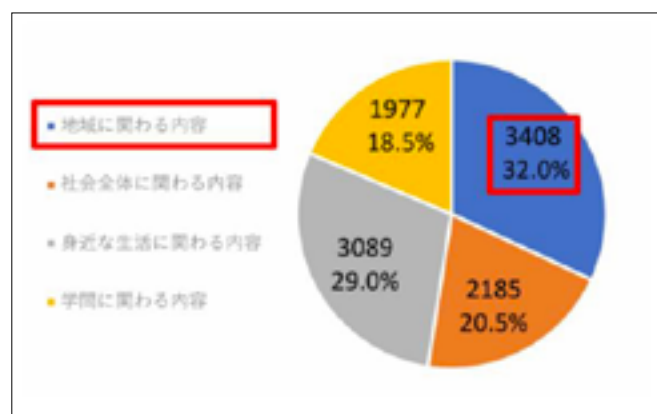
【県内企業経営者による講義】

「様々な会社が働きやすい職場や挑戦しやすい環境づくりに取り組んでいることを知ることができた」などの声が寄せられており、地域企業への関心や理解の向上につながっています。

4 地域と関わる探究活動の推進

本県では早くから「探究学習」に力を入れており、県立若狭高校で長年にわたり生徒が取り組み、開発された「宇宙サバ缶」は今春のドラマにもなりました。

「探究学習」は生徒自身の興味関心に基づき、テーマ設定を行い、内容を掘り下げていく取り組みですが、県では全高校生対象の「キャリアデザイン調査」を毎年実施しており、その中で、どの分野の探究学習を行っているかを聞いてみました。その結果、「地域にかかわる内容」と答えた生徒が32.0%と最も多く、次いで「身近な生活にかかわる内容」が29.0%、「社会全体にかかわる内容」が20.5%、「学問に関わる内容」が18.5%となりました。



【学校で取り組んでいる探究活動の内容】

この「地域をフィールドとした学び」には、次のような教育効果があると考えます。

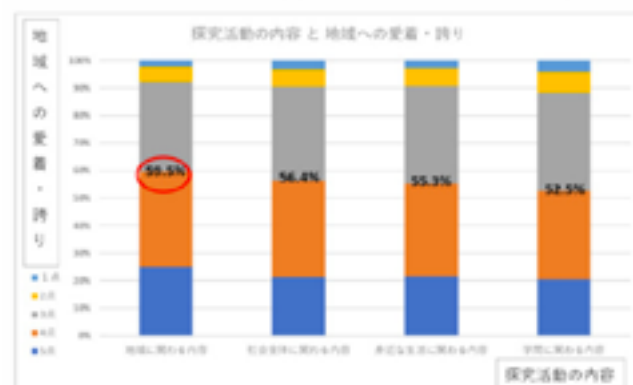
一つ目は、「社会の担い手としての自覚を醸成」することです。生徒は探究活動を通じて、企業、団体、行政、地域住民など、地域の発展や課題解決に携わる多くの

人々と関わります。その過程で、地域社会が多様な主体の支えによって成り立っていることを理解するとともに、自らも将来、地域を担う存在であることを認識できるようになります。

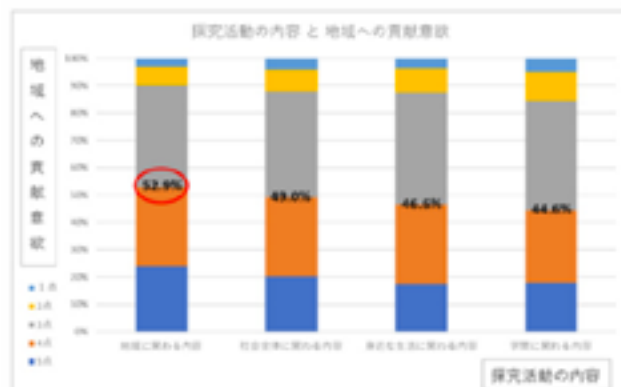
二つ目は、「実社会で役立つ課題解決力を育成」できることです。地域探究は「実践」が重要となります。机上で考えたことを実行に移すことの困難さを知ることにもなり、また、結果を検証し、改善に結び付けるプロセスを学んでいきます。

三つ目は、「体験による深い学びを体得」できることです。教育の本質は「体験」にあると考えます。具体的な行動実践を通して、生徒たちは手ごたえのある達成感や、または失敗した経験など、知識の習得だけでは得られない深い理解をもたらし、主体的な学びを支える大きな力となります。

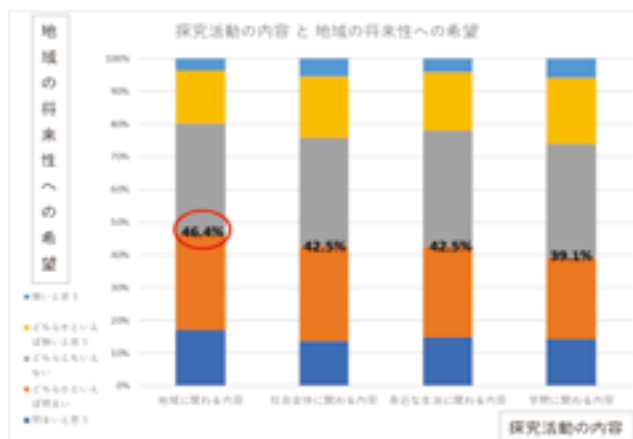
分析①「探究活動の内容」×「地域への愛着・誇り」



分析②「探究活動の内容」×「地域への貢献意欲」



分析③「探究活動の内容」×「地域の将来性への希望」



キャリアデザイン調査からは、「地域探究」を行っている生徒ほど、「地域への愛着・誇り」が高く、また、「地域への貢献意欲」も高いことが分かりました。さらに、「地域の将来が明るいと思う」割合も高くなっています。この3つの項目は相互に関連しており、これらをまとめて「地域の希望」と呼ぶことにしますが、この「地域の希望」を高めることが極めて重要であると考えています。

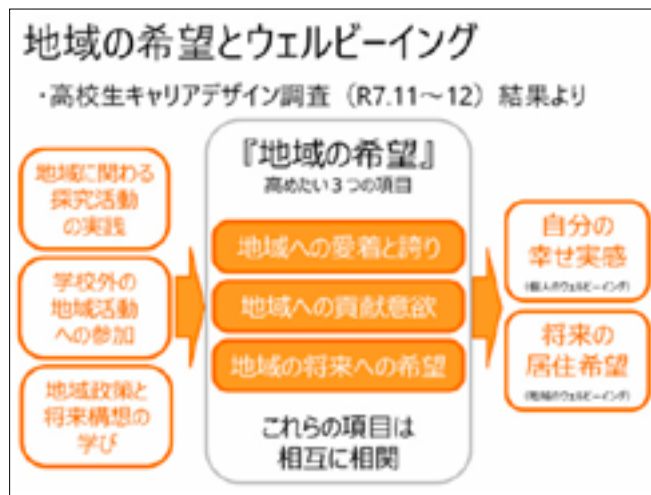
「地域の希望」を高める方策としては、「地域に関わる探究活動」や「学校外の地域活動への参加」、また、「地域デザイン講座」のような「地域政策と将来構想の学び」が有効であることが分かりました。

さらにデータからは、「地域の希望」を感じている人ほど、自分の幸せ実感（個人のウェルビーイング）が高く、また、将来、福井県に住みたいと思う割合が高いことが分かってきました。つまり、「地域への希望」は、将来の地域への居住希望を高め、持続可能性という観点からは「地域のウェルビーイング」を高めることにもなるわけです。

「地域の希望」は、生徒にとっての「成長の土台」です。地域に大きく根を張り、地域に感謝と自信を持つ。その確かな基盤の上こそ、将来幹を伸ばし、枝葉を大きく広げることができると考えています。

こうした観点から、本県では、ふるさと学習や探究

学習などを通じて、生徒が地域と関わる機会を積極的に創出するとともに、地域への理解を深めることにより、「地域の希望」をともに創る教育を推進しています。



5 高校生チャレンジアワードの開催

本県では、令和7年度から、高校生による「福井の魅力向上や地域の課題解決に向けた取り組み」を募集・表彰する「高校生チャレンジアワード」を開催しています。

本アワードでは、「福井をもっとおもしろく!」をテーマとして、探究学習をはじめとした学校での活動に加えて、部活動や自主的な学校外での活動を含め、幅広く募集を行いました。また、活動内容の評価にあたっては、結果が失敗に終わった場合でも、その過程を重視するなど、チャレンジを評価しています。

令和7年度には、県立高校17校、107チームから応募があり、322名が参加しました。

応募された取り組みは、まちづくりのためのNPO法人の立ち上げや福井に在住する外国人と地域住民の交流を促す企画の開催、地域の伝統食品の収益拡大、地域の鉄道の利用拡大など多岐にわたり、福井の魅力向上や地域の課題解決に向けた多種多様な挑戦が多数見られました。

令和8年3月には、これらの取組の成果を発表する実

実践発表会を開催しました。107チームの中から、審査で選ばれた17チームが、多くの高校生や教職員の前でプレゼンテーションを行い、来場者による相互投票を経て、最優秀賞1件、優秀賞5件を選出・表彰しました。

「高校生チャレンジアワード」については、令和8年度にも開催を予定しており、引き続き地域に飛び出し、チャレンジする高校生を応援していく予定です。

沢や生き方につながり、やがては地域の担い手として活躍していく人材の育成へとつながることを期待します。



【高校生による発表および優秀者への表彰】

6 おわりに

これまでにご紹介した取り組みにより、県立高校では、多くの生徒が地域に関心を持ち、地域についての理解を深め、地域の中で挑戦を行う姿が着実に広がっています。

こうした積み重ねの中で、生徒が福井や地域の未来に希望を持ち、地域の一員として関わり続けたい、地域の未来を支えていきたいと感じられるようになることを目指しています。そして、その思いが将来の進路選

研究機関とSTEAM教育をつなぐ オンラインセミナーの開催について

科学技術・学術政策局人材政策課

科学技術・学術政策局人材政策課では、教育委員会の職員をはじめとする自治体職員や教職員を対象に下記のイベントを開催予定です。

オンラインセミナーの詳細や「科学技術教育ア

ドバイザー制度」についてお知らせしますので、ご興味があれば以下の URL もしくは QR コードからぜひ事前登録をお願いします。お気軽にご参加ください！

研究機関とSTEAM教育をつなぐオンラインセミナー

目 的

文部科学省及び関係機関が実施する STEAM 教育の推進に資する取組について紹介し、探究・STEAM教育の充実と科学技術分野の次世代人材育成を促す。

対 象

各教育委員会の職員をはじめとする自治体職員や教職員

内 容

- ・科学技術教育アドバイザー制度について
- ・各研究機関や各科学技術教育アドバイザーの活動紹介
- ・その他文部科学省・国立研究開発法人科学技術振興機構（JST）の STEAM 教育関連取組の紹介

など

開催日時

令和8年8月21日（金）15:00 ～ 17:00

実施方法

Web 会議（Zoom ウェビナー）

傍聴登録用フォーム

< URL >

<https://forms.cloud.microsoft/r/DFu2KJfjvk>

< QR コード >



ちらっとご紹介！ 科学技術教育アドバイザーとは？

科学技術教育アドバイザー制度は令和7年度に創設した制度で、教育委員会や学校が国立研究開発法人等と連携することで、最先端の研究成果や知見を用いた探究・STEAM 教育を充実させるとともに科学技術分野の次世代人材を育成すること

を目的としています。

科学技術教育アドバイザーは、自らの専門性や経験を活かした出前授業や講演会などの STEAM 教育を推進する取組や、理科教育や STEAM 教育の取組について学校等へ助言を実施します。令和8年4月時点で 15 名を任命しており、所属機関も対応可能分野も様々です。



令和8年度科学技術教育アドバイザー一覧

https://www.mext.go.jp/a_menu/kagaku/week/mext_00001.html

科学技術教育アドバイザーの支援事例の横展開

科学技術教育アドバイザーによる支援の様子については、国立研究開発法人科学技術振興機構（JST）のSTEAM教育特設サイト「サイエンスティム」にて記事として掲載しています。こちらをあわせてご覧ください！

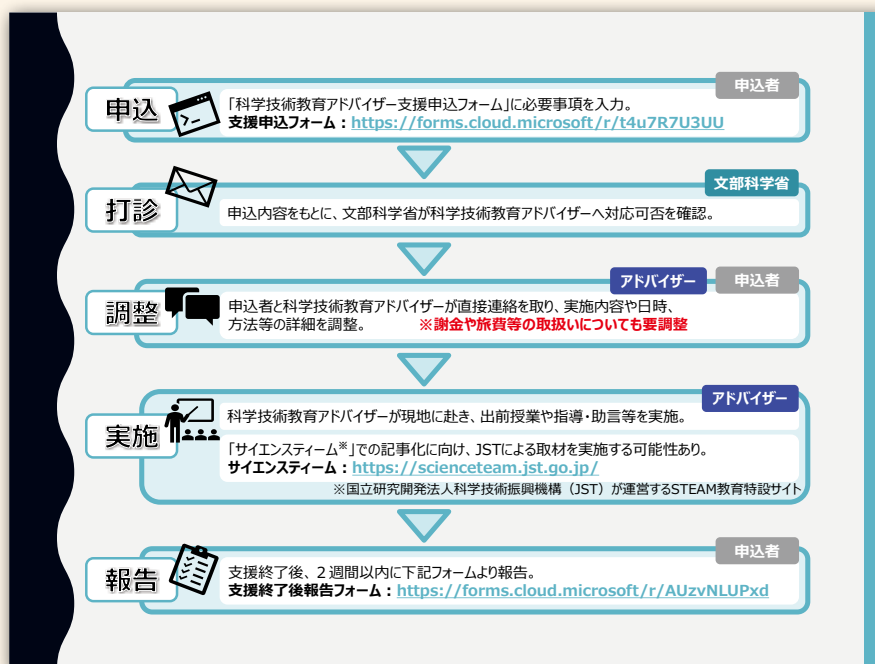


STEAM 教育特設サイト「サイエンスティム」

<https://scienceteam.jst.go.jp/>

科学技術教育アドバイザーへの支援依頼の方法

科学技術教育アドバイザーへの支援の依頼については、下図に記載のとおりです。申込者の希望を伺いながら、文部科学省が科学技術教育アドバイザーと申込者をマッチングさせます。



昭和100年 アーカイブズに見る女性活躍のあゆみ展

独立行政法人男女共同参画機構

男女共同参画機構（JGEPA）アーカイブズは、男女共同参画・女性活躍等に関する歴史資料の収集・保存・提供を行っています。

2026年は昭和元（1926）年から満100年にあたります。そこで、内閣官房では激動と変革、苦難と復興の時代であった昭和を顧み、新たな発見と未来を切り拓く機会とする「昭和100年」関連施策を進めています。JGEPA アーカイブズでも、昭和を中心に女性の歴史を振り返る展示をアーカイブズ展示室及びオンラインで実施します。

○会期

I期 人物編：6月23日（火）～11月30日（月）

II期 通史編：12月1日（火）～2027年3月31日（水）

※12月1日（火）午前中は展示入れ替えのため休室

オンライン：9月1日（火）～（II期の内容は追って公開予定）



○主な展示資料

- ・参第一號候補者公認證書（1947）（右上写真）

第1回参議院議員通常選挙で女性初の参議院議員となった奥むめおの候補者公認證書。奥むめおは、戦前から職業婦人社を結成して働く女性たちを支援していた社会活動家で3期18年間議員を務めた。

- ・家庭科の男女共修をすすめる会発足時の資料（1974）

市川房枝らが発起人となり、女子のみ必修とされていた家庭科の男女共修を目指した会の提言文書など。

- ・人々の暮らしを変えた昭和30～40年代の家電、2DKの団地模型などの資料（右写真）



なお、JGEPA アーカイブズでは、過去の展示パネルの貸出も行っています。男女共同参画推進に関するイベントや広報啓発等にご活用ください。



（左写真）セントヨゼフ女子学園高等学校
校中学校における展示例



詳細は下記をご覧ください。

<https://www.jgepa.go.jp/program/information/archives/tenji/2026/showa100/index.html>

「五歳の先生」

この春、私の文部科学省への出向に伴い、家族で地方から東京へ引っ越してきた。息子も新しい幼稚園に通うことになった。親としては心配だった。慣れない環境の中で寂しい思いをしないだろうか。けれど、そんな心配はあっけなく裏切られた。

息子は園に通い始めて、すぐに友達をつくった。先生から「もともと園にいたみたいですね」と言われるほど自然に馴染んでいたという。親が心配していたことなど、息子にとっては何でもなかったらしい。

一方の私はどうだったか。初日はパソコンの設定だけで一日が終わった。どのファイルがどこにあるのかも分からない。誰に何を聞けばいいのかも分からず、毎日必死に周囲についていく。これまでそれなりに経験を積み、多少の自信も持っていたはずなのに、新しい職場ではそんなものは簡単に吹き飛んでしまった。自分の無力さばかりが目につく。

そんなある日の夜、私は妻に愚痴をこぼした。

「やっぱり若くないと、新しい環境には適応できないよな」

言葉にしてみると、自分でも驚くほど後ろ向きだった。知らないうちに、環境の変化から逃げようとしていたのかもしれない。

すると妻が、保護者参観で見た息子の様子を話してくれた。

息子の幼稚園では右肩に名札を付ける。息子は友達に話しかける前に、そっと名札を見て名前を確認し、「〇〇ちゃん、一緒に遊ぼう」と声をかけているのだという。

その話を聞いた瞬間、胸を突かれた。息子はただ何となく友達ができたわけではなかった。転園してきた自分から声をかけなければ輪の中には入れない。名前を呼んだ方が相手との距離が縮まる。そんなことを五歳の子供なりに考え、一生懸命工夫していたのである。

私は新しい環境になじめない理由を年齢や立場のせいにしていた。息子の話を聞いた夜、自分が少し恥ずかしくなった。誰が教えたわけでもないのに、必死に新しい世界と向き合っている息子。その姿は、思っている以上に頼もしかった。

出向期間は限られている。残りの日々を「早く終わらないかな」と数えながら過ごすのか、「ここでしかできない経験をしよう」と前を向いて過ごすのかで、その価値は大きく変わる。

五歳の息子にできることなら、大人の私にもきっとできる。

今日も少しだけ勇気を出して、自分から一歩踏み出してみようと思う。息子の背中に励まされながら。

(M・S)

